
ようこそ、宵闇町五番街へ。

志紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこそ、宵闇町五番街へ。

【Nコード】

N4185Y

【作者名】

志紅

【あらすじ】

無^{まほろし}法^{ほろし}地帯^し幻影^し町。その最奥人外すら暮らす危険区域“宵闇区”万^し事^し解決をモットーに掲げる解決屋。ある日事務所を訪れた少年の依頼から、物語は動き出す…。

序章 サービス(前書き)

完全なる志紅の趣味です。名前が変なのばかりです。

あと区分がわからなかったのでファンタジーにしましたが、違つかもしれません。

その辺をご容赦下さいm) ((m

序章 サービス

この度は解決屋 酒月サカヅキをご利用いただき誠にありがとうございます。当社は皆様がお困りになっている事件・悩みその他何でも、解決が導き出せる事柄でしたらどんなことでも承ります。

公表に気が乗らないこと、どこでも解決が難しいと判断されてしまったこと、そんな悩みには是非当社をご用命ください。たとえそれがどんなに困難な案件でも、必ずや皆様に御納得いただける結果を残す…それが当社のモットーです。

さあ本日も、皆様に御納得いただける解決をもたらしてご覧に入れますしょう…。

*

からん、とドアのベルが鳴った。

その音に猫谷ネコヤ三日月ミカツキはまさに猫よろしく耳をピクリと動かすと、怠そうな声で黄昏、と言ってまたソファに沈む。

呼んだというよりはただ咳かれたその声に、同じく面倒そうな顔で…けれどもきちんと答えて奥から青年が出て来た。そのままドアに向かった青年を、三日月はやはり怠そうに見守る。

しばらくして、ギィ、という音と共にドアが開いた。

青年…霧生黄昏キリユウ タンガレの後に着いてきた少し怯えた様子の女性の姿に、三日月はニッコリ笑って立ち上がる。思い切り勢いをつけて立ち上がった三日月に女性はびくりと体を震わせた。

「…あ、の、…!」

「OKOK、事情はそっちのソファで聞きますよ?…とりあえず、」

未だ不安げな女性に、満面の笑みと共にスツと手を差し出す。…好みではないかなと心の中でだけ呟いて。

「…ようこそ、宵闇町五番街“解決屋 酒月”へ!」

今回もまた、楽しめそうな予感がした。

一章 人生は思い通り

「さて、とお…。今回はどのような御用向きで？」

おねーさん、とにつこり笑って首を傾げると…27、8位かな、ギリおねーさんな感じの女性が頬を赤らめて口を開いた。ま、俺ってバイケメソですからねえ。フフン。

「…リリイを…私のペットを、探して頂きたくて…！」

継るような必死の視線に、いやいやじゃあ俺に見とれてる場合じゃないでそーと心の中で突っ込みつつ人差し指を唇にあてる。ふむ、と黙り込んだ俺に代わって今度は黄昏が女性に話しかけた。

「失礼ですが、“国”側の方ですよね？」

「え、ええ…。」

「なるほど、ペットの目撃情報があった…とか？」

でなければこんな危険な場所に来ないだろうと言いたげなニュアンス。対して女性は歯切れが悪い。

「はい、…いえ、というより…」

口を嚙み俯いた女性に黄昏は不思議そうだ。こちら、きちんと意図を汲み取らなきゃダメじゃん。苦笑してとりあえず俺は言った。

「…もしかして、“怪猫”のペットですかあ？」

「…！どうして、」

弾かれたように顔を上げ、驚く女性に笑ってみせる。推測するのはそう難しいことでもない。

「ペットの現在地とか、普通はだいたいでそんなに目星は付かないもんですけどあ…あなたはわざわざここに来た以上、少なくとも“幻影町”^{まほろし}にいると分かつてる訳ですよねえ。じゃあそれはなんで…って逆算して考えれば、おのずとねえ？」

それでもまだ訝しげな表情の女性に俺は更に言葉を重ねた。こんなに頭働かせたのいつぶりでしょう。ていうか、なんで俺こんな言い訳みたいなこと言ってるんだろ？

「最近はあるまり、特に“お国”じゃあ怪猫なんて見かけませんし聞きませんよねえ。つまり、お国で見つかってしまったら恐らく大騒ぎになる。でもそれがないってことは…、無法地帯の幻影町かもしれない、ってところですかあ？」

「……はい。」

俯く女性に黄昏が呆れたようなため息を吐く。

「知らなかったならまだしも…、それなら国が使ってる首輪でも調達しておけば良かったのでは？」

口さがないねえ。まあ大いに賛成だけど。とニヤニヤ笑っていると、肩を震わせた女性が悲痛な声を上げた。

「首輪なら、してました！でも…いつもなら周期のとき側に付きつきりているんですけど、今回はどうしても外せない仕事があった…！それに、いつもよりずっと状態も良かった。なのに、家に帰ったら引きちぎられた首輪が落ちていて…。」

両手で顔を覆った女性にさすがに居たたまれなくなっただのか、黄昏

は若干居心地悪そうに顔を逸らす。じゃあ最初から言っつんじやないよバカちゃんめ。

「あの子に、…リリイに何かあったら、私っ…！」

「落ち着いてください。」

どうやらまた興奮し出した女性の横に回って背中を軽く撫でる。頼りない背中は一瞬ひくりとふるえた後、少しずつ痙攣が引いていった。震えが完全に収まったのを確かめてから、俺はあえてのんきな間延びした声で女性に話しかける。…うんそこKYとか言わない！

「…原田さん、大体の事情は分かりましたあ。とにかくこの依頼

…“酒月”はお受けしまあす。」

「本当ですか！」

ガタンと音を立てて椅子から立ち上がった女性は良かった、と吐息を零した。お国の危険動物に指定されている怪猫の搜索依頼だ、他の探偵事務所なんかには頼めなかっただろうし、緊張するのも当然かもしれない。

ホントですよあ、と女性を安心させるように微笑み、けれど直ぐに顔を引き締める。

「まずは、…黄昏、」

「分かってる。」

即座に反応した黄昏は片手に持っていた地図　って呼べるほど立派なもんじゃないけど…　をテーブルの上に広げた。さっすが俺の弟子だけあるよねえ？

「これは…、」

「幻影町の全体の地図ですよあ。」

地図に目線を落とした女性に頷いてから、俺は地図の三区分されたうちの一つを指差した。

「ここが宵闇地区。三地区の配置なんかは…だいじょぶですよねえ？」

ちらりと目を向けると、女性は小さく首を動かす。もちろん縦にね。そうだろうとは思ってたけど、ここに入るのにきちんと下調べして来たんだろう。

「じゃあ話が早い。…恐らく色々考えるとお、一番リリイちゃんが居そうなのはあ…、」

ここですかねえ、と俺が指差した場所を上から二つの顔が覗き込んだ。

*

「…んー、あれかなあ？」

現在地、宵闇地区二番街商業エリア。

依頼人の原田さんから貰ったリリイの写真片手に、俺は首を傾げていた。

「グレーに黒の斑、青の瞳… まず間違いないと思っけど…。」

ううん、とさっきより更に首を傾けて猫と見つめ合う俺の姿は、ま

あかなり珍妙なことだろう。それでも注目なんてされないのがこの町なんだけれど。…ていうか、こんなに近くで見ても逃げないとか、それだけでもこの猫が普通じゃないことの証明にはなる気がするけどねえ。

「むう…読みは合ってたけど、こんなに人…いや猫相が変わるとは

」

ペットとして飼われてた動物にそうそう狩りが出きるとは思えない。だから宵闇唯一の商業エリアであり、露店なんかもあるここに来るだろう、っていう俺予想。でも居なくなってから結構な日数食べてないっぽいリイ（仮）は、やせ細って写真とかなり変わっていた。さあどうすべきか、とまたまた首を傾けて。

「…あ、そうだ。」

確か原田さんは、リイは名前を呼ぶと誰でも返事をする…とか言ってたな。うんよし、それで行くしかない。

「…リイ？」

頼む返事して、もう手掛かりないんだよー、と祈る俺の思いが通じたのか。

「…ナン。」

少し怪しむようにじっとこちらを見ながら、それでもリイは小さな声を返した。

「うっしや!」

良かったと笑ってから原田さんに預かったキャリアを取り出すと、リリイはその中にゆっくりと入っていった。平和的解決万歳。

「うへへ臨時ボーナス…って、黄昏?」

「…ミカ、」

ニヤニヤしながら呟いていると、五メートル程離れた地点に黄昏の気配を感じて振り返る。どうした、と首を傾げると、黄昏がなんだか滅多にしないもの凄く申し訳無さそうな顔をして立っていた。…あれえ、なんか凄く嫌な予感。

「…それ、なあにい?」

「…拾った。」

いやそうじゃなくて、と言って顔を引きつらせる。黄昏が手を引くのは、

「子供だな。」

少年でした。

……いや、意味分かんないからね?

「……………依頼人だ。」

渋い顔の黄昏になんだか楽しくなってくる。こんなフツーっぽい少年が依頼人…ねえ？

「…へえ？そつか。」

それって、

「楽しそうな臭いすんねえ。」

もしかしたら棚ぼたかもしれないと俺は静かに目を細めて笑った。

一章 人生は思い通り（後書き）

原田さんが名乗ってませんが、まあそれは事前にアポを取ってたというところで（おい）

二章 電気のない都市（前書き）

ここからチャラさを前面に出していきます。

語尾のびのびです。

…今更ですが三日月はチャラ男。

二章 電気のない都市

「…んで？」

i n・事務所。

とりあえずお話を聞きますかということ、リリィと少年と黄昏と俺、四人でここに戻ってきていた。黄昏によると、五番街の入り口付近で人攫い（キッドナツパー）に言葉巧みに拐わされそうになっていた少年を助けた、ってことらしいけども。

そんなことをつらつらと考えながら、俺はソファで縮こまる少年を目の前に首を傾げる。ここは宵闇町、その中でも知る人の少ない抜け道を通ってしか辿り着けない五番街。何も用のない人間が訪れるはずもない…：ていうか真つ当な人なら一生来る機会なんて無いだろう場所だよ？

「そんな所に君みたいなお少年が来るなんて…」

よっぽどの事情お？と下から覗き込んで尋ねると、顔を背けられた。ひどい。

どうしたらいいのさ、と困る俺と相変わらず顔を背けたままの少年を少し呆れたように眉を寄せながら見て、それからため息を吐いた黄昏が少年に声を掛ける。

こう見えて黄昏は子供受けがいい。男前だけど目線の鋭い黄昏は、愛想がいいとはいえないのにだ。何それギャップ萌え？じゃあ保育士さんにでも転職すればいいんじゃないの？…俺は笑ってても逃げられるばっかなのに。…：うんごめんなさい八つ当たりです。て

いつかただのやつかみ？

一人でどよんと落ち込む俺に、うわまたやってるぜこいつ的な顔をした黄昏が近寄ってくる。…ごめんなさいねえ子供と会話一つ出来ないダメ人間で！

「…子供に好かれる奴みんな死ねっ。」

「…急にどうした。」

「あ、声に出てたあ？ごめん気にしないでえ。…そこで、少年は何だつてえ？」

え、敬語じゃなくなったら途端に喋り方がウザイって？いやいやこれが俺の標準装備だもん、しょうがないしょうがない。慣れて、いや慣れる。

「ん、…母親を探してほしいそうだ。」

「…え？」

黄昏の最初のん、が可愛くて聞いてなかったに一票。…違うよ？別にBでしな関係とかじゃないからね？二人ともマジ女の子大好きだからね？…黄昏は知らないけど…とにかくホントなんだからっ！

…と思いながら珍しく眉間にしわを寄せたら、黄昏が何か勘違いしたようで軽く溜め息を吐いた。

「それだけでここまで来るなんて、普通なら信じられねえ話だが…、」

そう言つて脇のソファで小さくなっている少年を見て、また溜め息。そんなに溜め息吐いたら幸せ逃げるよ？そして結局どんな案件？

「政治家の知り合い「宗一郎おじさんは父さんのお兄さんです。…：そうか、悪い。まあその宗一郎おじさんつのに母親搜索の助力を頼んだら、ココを紹介されたらしい。」

なるほど、母親搜索ですかー、と頷いた俺の思考が黄昏にもバレて

たのかなんか怪訝な顔された。やべえやべえ、これは話題を変えなきゃ。

「ふーん…そつかあ…宗一郎おじさん、で政治家ってえと、加賀美宗一郎氏かねえ？」

「加賀美？つて…ああ、たまに来る狐みてえなオツサンか。弟がいたなんて初耳だな。」

不思議そうに首を傾げる黄昏くんは、いい加減そんな動物みたいな感じに人のこと覚えないう方がいと思う。名前で覚える名前前で。と苦笑しながら、確か妾腹の弟さんがいたねえ、と教えてやる。

「…妾腹、」

同じセリフを呟いて、だけど表情の違う2人のコントラストが面白い。こんな町にいて特にこんな場所でそんな話聞き飽きるほど聞いてる黄昏の呆れたような顔と、まだ幼い…って言っても10歳くらいか 少年の、妾腹？何それ？な顔。いいねえ、純粹で。

「…あの、」

俺はニコニコ2人を見つめてるし、黄昏はむすっとしてるしで落ちた沈黙に乗じるように少年が口を開いた。…あれ、今さらだけこの子の名前知らないや。

「ねえねえ少年、とりあえず君い、名前はあ？」

「…人に聞くとときは、」

首を傾げ尋ねると、質問を無視されたのにムツとしたのかそれとも相当俺を警戒してんのか、なかなか賢い切り返しをされた。…これは、先に自分が名乗れ、って意味だよねえ。

「…ああなるほどお。ええと、俺は猫谷三日月、気軽にミカさんって呼んでね？んでこっちは、」

ちらりと黄昏に視線をやると、一度瞬きをして返事を返される。

「さつき教えた。」

「…んー、そかあ。んでえ、今度こそ君の名前はあ？」

振り向けば、少年はぎこちなくこくりと頷いた。いやいや、だからほんと警戒しすぎだよ。何なの？泣くよ？

「…斎藤修哉です。」

「ありやあ、そりやあ…」

「ミカ。」

普通、と言いかけた俺に黄昏が言葉を被せる。余計なこととは言うなと目で訴えてくるのはいいけど…顔怖いよ。初めて見た人にはきつと伝わらないって。

「はいはい。…んで、しゅーやくん、質問があつたんだよねえ？なあに？」

まあ、俺の知り合いには普通じゃない名前の人しかいないからそう思うだけかと自己完結して首を傾げる。

…アレ、目ガ合ワナイヨ？俺の自意識過剰？

「…泣きたくなってきたあ…。」

「あの、」

「あ、ごめん気にしないでえ。…それでえ？」

はい、と頷いて口を開いたしゅーやくんとは、やっぱり視線が合わない。…うん、別にいいんだけどね。

「僕、おじさんに道筋を教えられてとにかくここに行け、って言われただけで…。どんな所なのかも、なんて所なのかもよく分かってないんです。… 宵町五番街、って？」

「…あはあ、」

「そこからか…」

俺はもはや笑うしかない。そして黄昏はまたまた溜め息をついて額に手を当てていた。…ギャラは加賀美氏から貰えんだよねえ？

「ちょっと長くなるけどお、いいかなあ？」

「よろしくお願いします。」

「じゃあえーと、まず街の構造から、ね？」

めんどくさいなあ、と思いながら、俺は口を開いた。

*

宵町五番街。

正確には、まほろし 幻影町宵区五番街。

三区分された幻影町の最奥部にあり、また最も危険なのが宵闇区である。まあなぜ宵闇区と呼ぶかというところ、ただ単に宵闇区だとゴロが悪いというだけの理由なのだが。

それはさておき。

幻影町は、それ全体が“お国”では危険地帯とされる場所で、他所よりぐつと治安は悪い。けれど、町の中でも治安の悪さには更にレベル分けがあるのだ。

まずは、幻影町の入り口に位置するあかつき 暁区。学生の不良やチンピラ、並みレベルの893さんなど、比較的一般人に近い人間の彷徨く場所である。治安の悪さでいくとそこらの繁華街と大差ない。

次に、ちょっとヤバいぜ？な黄昏区。いかにも怪しげな人間ばかりが彷徨き、気を抜けば売り飛ばされるような町。暁区でこの町をな

めてかかった新参者が、ここで痛い目に遭うことが多い。あと黄昏まで来るとちよつと人外チックな奴らも出てくる。

そして最後がここ、宵闇区。もはや非人間・異能者しかおらず、そうでなくては生き残れない。普通の間が入り込めば即、死、または奴隷の仲間入りだ。更に宵闇区の怖いのは、誰も助けてはくれないということ。たとえ力があっても、暗黙の了解“弱肉強食”。他人のことには首を突っ込まないのが宵闇区のマナーだ。

*

「…んーとお、ここまでではOK？」

「はい。」

引きつった顔で頷くしゅーやくんは、やっと自分があまりにも危ない場所に来ていたと気づいたらしい。そんな…と絶句していた。気付くの遅いよねえ。思わず小さなため息を吐くと、しゅーやくんはびくりと肩を震わせる。…いやごめん、俺、そういうのウワゼWエWって思っちゃう人だからさ。

「うん、まあ、しゅーがないよお。てゆかさ、何も教えずにこんなとこにぶつ込んだ叔父さんにも責任あるじゃあん、ソレ」

一応フォローした俺に続いて、チラリと窓の外を見た黄昏が言う。

「もう日が暮れた。すぐに暗くなんのに今更帰れねエだろ。…とにかく事情、説明してみる」

「…はい、えつと、それは…」

眉を寄せ下から見上げてくるしゅーやくんにニコ、と笑う。俺らは他の脳足りん共と違って弱者の味方だからね。…なんつって。

「うん、依頼は受けるよお。お母さんを助けたいなんて健気な少年を捨ておけないしい？」

なあんで、嘘八百並べ立ててみる。ま、実際のところはさ、あのおっさん、やっぱ政治家だけに金払いすげえ良いんだよね。俺は身内以

外に優しくはしない主義なんだ。表面上はさておき。でも一応そんなん言う訳には行かないし。……信じてくれたかな、くれたよね、お外の子だもん。幻影町の子はねえ、うん、怖いよ、すつごく。なんか殺伐としてる。

「っ良かった！じゃあよろしくお願いします！」

そんな俺の内心などつゆ知らず、ペア、と表情を明るくさせた少年は若干深刻な声で言葉を続けた。ところでさ、この位置からだためっちゃつむじが見えるわ。あ、若白髪みつけ。おおう、結構ある。……いやごめん、真剣に聞けって話だよな。

「僕の母は、齋藤万さいとうまひといいます。歳は…確か、36。いなくなつたのは二週間前です。スーパーのレジ打ちのバイトをして…夜はいつも8時には帰ってくるんですけど、その日は夜中になっても帰って来なくて。遅くなるとは聞いていたので気にしないで寝たんですけど…、学校に行つて、帰つて来て夜になつても母はいなくてこれはおかしいと思つておじさんに相談したんです」

「…うんとお、じゃあこの時点での疑問、差し当たつて二つイイかなあ？」

一度言葉をきつた少年を眺めながら、俺はそう尋ねる。しゅーやくんははい、と言つて小さくこくりと頷いた。

「まずはあ、警察には連絡したあ？叔父さんと仲が良かったとしても…ふつーは警察に連絡するものでしょ？」

ん？と顔をのぞき込む。警察に知れてるかどうかは、今後の意向に大きく関係して来るもんね。確認しときたいのよ。

「一応、叔父さんに電話した後相談しましたけど…あんまり、大事だと思つて貰えてない気はします」

しよぼんと肩を落とすしゅーやくん。うーん、ま、そんなものか。ただの失踪としか思えない状況に警察が本腰入れるとは考えにくいよねえ。だけど、この少年がそう考えたのはなんでなんだろう。

「しゅーやくんはあ、どうしてそう思つたのお？」

「事情を説明しに行ったとき…頼れる親戚はいるかとか、学校は行ってるかとか、僕のことばかり聞かれて。…お母さんのことは何も聞かれなかったんです」

不満げな表情は、ふむ、こんな時にのんきに学校行ったりなんかできないって気持ちの表れだろうか。まあ人生そんなもんだよ。子供がその後大丈夫そうなら、ほぼ影響はないもんねえ。

「OK、じゃあ他には何か？」

「あ、えと…これ、お母さんの履歴書と、あと、写真です」

「おー、どれどれ」

差し出された紙二枚に手を伸ばすと、その手が届く前にピリリ、という電子音がした。

「ツうわ!」

「あ、ごめんしゅーやくーん。黄昏、いてらー」

「俺かよ…」

はあ、とゆるくため息を吐いて前髪をかきあげ、それでも踵を返していった黄昏の背中に軽く手を振ってから、今度こそ正面に向き直り紙を受け取る。少し戸惑った様子のしゅーやくんに、たぶん叔父さんだねえと補足しながら紙に目を通した。

「…あのさあしゅーやくん、」

「え、あ、はい!」

「つかぬ事をお聞きしますが…お父さんは？」

黄昏がいないタイミングで思い出して良かった。息をつきつつ目は紙に落としたままでいると、彼は静かにポツリと呟いた。

「詳しいことは、よく…分からないんですけど、僕が小さい頃病気で、って言ってました」

「ん、なあある…。じゃあ、お母さんでもお父さんでも、おじいちゃんおばあちゃんと連絡は？」

「お父さんの方はおじいちゃんかもう、あの、死んでて…おばあちゃん入院してるんです。お母さんの方は、会ったこと、ないし」
また、俯く。にしてもしっかりした子だなあ。普通これぐらいの頃

はもつと落ち着きがないもんだと思う。もしこんな状況に陥つたらパニックになるよね、絶対。ところでさ、不自然なくらい親戚いなさすぎじゃね？真つ先に連絡取れるであろう祖父父母が全員連絡不可状態とか、マジどんなご都合主義よ。

「…あの、それと…」

おずおずと再び口を開いたしゅーやくんにハツとする。いけないいけない、ボーっとしてたや。ペシミズムに浸ってる場合じゃあないよ。パチンと軽く自分の頬を叩いて、なあに？と彼に向き直る。

「え、つと…母の、行方なんですけど、」

「ああ、そのことなら大丈夫だよお」

何故かひくりと頬を引きつらせて言ったしゅーやくんの言葉を遮り指を鳴らす。

「近くに優秀なじょーほーやさんがいてねえ…その人に依頼しようと思ってるから」

「…そう、ですか」

まあその分コストはかかるけど…その辺は加賀見氏に頼めば何とかなるしよお。下手に今誤情報聞いちゃって見当違いの捜査するよりはいいしね。たぶん加賀見氏が調べた母親の“推定範囲”を言おうとしてたんだろうけれど。…しかし奴さん、のってくれっかねえ。

そんな事を考えながらソファでごろごろと寝転がっていると、黄昏が帰って来る気配がして俺は顔を上げた。

「んー…、つかえりー」

「ああ、…ミカ、ちよっといいか？」

「いやん黄昏くんたらせつ・きよ・く・て・kぐほあ！？」

殴られました。しかも結構全力で。冗談の通じない奴だぜ、このまじめっ子め！ いや仕事だけだけどな。でもそんな所もスキ！！

(注…この作品はフィクションです)

とか心の中だけでダラダラと考えながら、僕、ハラハラしてる！と言いたげな顔をしてこっちを見るしゅーやくんと目を合わせて、追い払う様にしゅーと手を振ってから部屋の奥を指差した。

「…え、と、」

「あっち寝室だからさあ、適当に服みつけて寝てていいよお。今日ふつーに波乱万丈で、疲れたっしょ？」

ね、とにっこり微笑むと、少年は不安そうにこちらを見てくる。

「二人は…、」

あらあら、そこ突っ込んじゃダメっしょお。つか普通突っ込まんしよー。空気読もうぜ。

一人で不安なのかしらねえ。

「んー、俺らは今から仕事の打ち合わせしなきゃだからさあ。あれだよ、夜こそが我らの時間的な」

うんうんと腕を組んで一人納得していると、しゅーやくんはちよつと怪訝そうな顔をしていたけど小さく頷いた。

「分かりました、…おやすみなさい」

「はーい、おやすみん」

「…おやすみ」

黄昏は返事をしてから部屋を出て行くしゅーやくんにそう手を上げて。俺はソファにだるんともたれ掛かったままニコニコと笑みを送った。

「さあてと、じゃあつまない話しよつかあ。」

「つまんねえとか言うな」ゆるゆると吐息を零した黄昏がソファに座るのを眺めながら、俺はヘラヘラと笑った。だって。ちよーばかりかみただけど、心情的にはちよつと不快だけどさ。楽しくなりそーな、予感。

「ふふふ、ごめんごめえん、で、加賀美氏はなんだってえ？」

自分の膝に頬杖をついたまま、俺はこの先を思い笑った。

幻の夜はそれぞれに。今日も静かに残酷に、更けて行く。

やつつけ仕事

爽やかな朝。ピーチチチ、という小鳥たちの声を聞きながら、俺はコーヒーの入ったカップを傾けた。

「…はっはっは、いやぁ… 焼き鳥食いてえ」

は、目覚め？最悪ですけど何か。：昨夜。仕事の話を終えた後、黄昏の部屋を少年に貸して、俺は自分の部屋、黄昏はもう一つの部屋で寝たワケ。部屋の並び、奥から黄昏、俺、少年。 うん、殺人音波が俺に直撃だね！死ぬかと思った！ホントあんな攻撃食らったのH A J I M E T Eだよ。薄い壁のせいで俺に500のダメージだし。てかしゅーやくんはなんなの？人外なの？人害なの？死ぬの？しかもドアが緊急用に防音設備しっかりすぎ分厚すぎて入る前に仕掛けられた罠に気付けなかったし…！てかとりあえず、壁！安アパートか！それかラブホか！ここ結構家賃高い筈なんだけどなああ！…？という訳で、寝不足どころか寝付けていない俺です爆発しろ。

「あ”ーあ”ーあ”ー」

頭痛えよど畜生、と頭を抱えていると、キィ、とリビングのドアが開く音がした。

「…っせえな、なに騒いでん d」

「お前理由は聞かずに一発殴らせる」

弟子を氣遣った兄貴の心をぐしゃぐしゃポイするような発言をおしでないよ黄昏きゅん キャラ変わってる、とか言わないの、てか言わせなーい！

*

「とりあえず君は今日から猿轡を嵌めて眠りについて貰うよキラッ」

キヤラ崩壊なんて気にしない　な男前な心境でウィンクした俺を迎え撃ったのは、うろたえ顔のしゅーやくんと呆れ半分罪悪感半分顔の黄昏でした。

「え、…え？」

「…そこまでしなくてもミカが耳栓でもしてりや良い話だろ」

「バカかちみは！バカかちみは！はい大事なことなので二回言いましたここテストに出るよ！！」

言いながらゆさゆさと黄昏の襟首引っ付かんで揺らす。しゅーやくんはあわあわしてっけどね、うん、知ったこっちゃねえwwつうか。

「落ち着け」

「落ち着いてられっかこの粗忽者が！」

「粗忽者…」

眉間をひくひくっつとさせる黄昏に、どうしよう吹き出しそうです。いやホント結構さつきまで真面目にイライラしてたんだけどさ、なんか面白くなって来ちゃった。

「あれは人間の仕業じゃないよかの弾道ミサイルテポ　ンも秘密兵器ポセ　ドンも真っ青の大量殺戮兵器だからね！」

「　前者はともかく後者はフィクションじゃねえか、じゃなくて…ハア」

溜め息を吐いて困ったようにぐしゃぐしゃと頭を掻く黄昏。いやはや、まじめくんは真剣にしか捕らえらんなくて困るね、どうも。

「　…とまあ三日月・ザ・シヨータイムはここまでにしてえ」
「……………」

「まじめな話、ちょっとこれだと俺と黄昏が一日おきに不眠症な状況になっちゃうんだけど…どうするう？」

「そんなにひどいですか」

「うん」

「即答かよ」

「え、つと…」

しゅーやくんはそう言って困ったように眉尻を下げた。いやまあ別

に悩んで貰わんでも打開策は考えてあるんだけども。

「…三日月さん、あの、お友達とか…」

「うん謂わんとすることは分かるけど聞き辛そうに言うのヤメテえ。俺に友達いないみたいじゃなあい」

あれでしょ、友達のとこに泊めて貰おう作戦でしょ。しゅーやくんを野宿させるわけにもいかないしね。一瞬で八つ裂きにされるよ。でも俺の友達ってか知り合いも、油断したら寝首かかれるような人等ばっかだしねえ。てかさんな人間兵器送ったとか知れたら俺が寝首かかれちゃうよ。て訳で、

「でもそれはやっぱし君が危ないから却下ねえ？…んーとりあえず、超高性能耳栓買ってー、俺と黄昏で端の部屋入ってー、後はアしだ、音波吸収剤があったはずだからそれを部屋に設置してつと…」
顎に手を当て、ぶつぶつと呟く。それを見る二人の目が若干冷たいのはもう気にしない。一通り諸々の対処法を列挙し終えた俺は、顔を上げてにつこりと笑った。

「てことで黄昏、GO！」

「俺かよ！」

ナイスツツコミです黄昏くん。

*

面倒くさいことは全部押しつけやがって…！とギリギリ歯を噛みしめながら出て行った黄昏　あれだよね、黄昏って常に全力で生きている感じがする、肉体的ってか精神的に　を見送ってから、俺は再び眠りにつきました。眠り姫のごとく。…いやだって、普通に眠いよ？お前同じ状況体験してみるよああん？ただ眠れないのとは訳が違えんだよ！とは言えいつだって爆睡する訳じゃないから、多少疲れは残るんだけどねー。でも大分楽だよ。ベッドから起き上がりぐるぐると腕を回しながらリビングに行く、しゅーやくんが紅茶を飲みながらソファでテレビを見ていた。俺が入ってきたのには気

付いてないらしい。

「おっはよー、しゅーやくん」

近付いていってがしつとソファの後ろからのしかかると、しゅーやくんは何だか気まずげに、…おはようございます、と呟いて、それからハツとしたようにソファから慌てて立ち上がった。何々、どうしたよ。

「あの…っ勝手に紅茶…あとテレビも！」

「あいや、そんなことお？全然へーきだからあ、そんな遠慮しないでいいよお。寧ろ俺にもいれてちょ」

「あ、はい！」

しゅーやくんがパタパタとキッチンに走っていくのを見ながら、ソファに座ってテレビを見ていると、その内紅茶が運ばれてきた。砂糖は、と遠慮がちに聞かれて2本指を立てると角砂糖を入れてくれる。…うわなにこの快適空間。黄昏も入れてくれるっちゃ入れてくれるけど、基本お客さんが来るときだけだし、自分でいれるとか言うし。しゅーやくんマジ天使。

「あ、そうだしゅーやくん、」

「？はい」

紅茶を飲みながらまつたりしているとやることをすっかり忘れそうだったので、先に口に出しておくことにする。

「昨日さー…知り合いの情報屋さんとこ行くっつったじゃあん？」

「…ああ…」

「んでそれ、今日行ってくっから。もうすぐ黄昏帰ってくると思うし、大人しく留守番しとってー。あ、俺と黄昏の部屋以外ならいじってだいじょぶだからあ」

「分かりました、…でもあの、」

ルビー色をした紅茶の水面に一度視線を落として、それから訴えるように俺を見据えるしゅーやくんに瞳を細める。そんな顔してもダメよ。

「それは無理、かなあ」

ゴメンねえ、とヘラヘラ笑いながら視線を下げると、感情を隠しきれない両手が洋服に皺を作っているのに気付く。よっぼどか。いやあ愛されてんね、お母さん。

「…そう、ですか」

「うん。お母さんのこと、心配なのは分かるけど君が無闇に動いて解決することじゃないよう。危ない目に遭うのも本意じゃないしねえ」

それもホントだし、嘘は言ってない。だけどそれだけじゃないのもやっぱり事実だ。情報屋というもんは、古今東西どうやら厄介な生き物のよう。そもそも今日は情報収集の依頼だけして帰る予定だし、

「ねえ？と頭をぽふぽふ撫でると、しゅーやくんは不服そうながらも小さくはい、と頷いた。

「うんうん、いー子お。 んじゃ行ってくんね」

いってらっしゃいと手を振るしゅーやくんに背を向ける。そして俺は…内心溜め息を吐きつつも、厄介な友人の許へ向かったのだ。た。

*

「……ああ、そうか、分かった。 ……また連絡する」

僅かな途巡染みた沈黙の後、ピツという音と共に会話の糸が切られる。男は疲労を吐き出すように溜め息をつく、組んだ指の上に少し後退し始めた額を乗せて唸った。

男は皇国内でそれなりの権力を持っている。故に政府の重要案件に関わることも多く…しかし、今回の件では詳しいことを殆ど聞かされていない。そんなことは今までに余りなかったことだ。ただに、男は戸惑い、同時にいやな予感に苛まれていた。

「何だか、ひどく… 胸騒ぎがするのだ。 ……杞憂なら良いが」

また深く溜め息を吐いても、動き出してしまった事態は止められないし、上に進言出来るほどの権力はまだ男にはない。どうしようもないかと手元の書類に目を落としたところで、ドアをノックする音が聞こえ、入室の許可を返した。

「先生、会議のお時間です」

「ああ、今行く」

部屋に入ってきた細身にメガネの秘書の言葉に頷き、先程まで見ていた書類をまとめる。立ち上がるうとして、あ、というつぶやきが聞こえ顔を上げた。

「?…どうした?」

「あ、いえ…ただ、」

視線の先を辿れば、窓の向こうに暗いというより黒い夜空が広がっている。

「ああ…満月、だな」

微かに目を眇め、それ以上何の感慨もなくただ秘書のことを意外とロマンチストなのだと勝手に批評する。ややあって男はくるりときびすを返して部屋を出ていった。

パタンと音を立てて閉まったドアと男の後ろ姿を、青く丸い月が静かに見下ろしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4185y/>

ようこそ、宵闇町五番街へ。

2011年12月29日14時49分発行